令和6年度　学校関係者評価書（様式）

鈴鹿市立鈴西小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ＩＣＴ活用	１　全国学力・学習状況調査やみえスタディチェックの結果を分析し、授業改善をすることで、一人ひとりの学びの質の向上を図る。 ２　学期に１回、家庭学習強化週間を設け、家庭学習の充実を図る。 ３　図書巡回指導員を活用しながら読書活動を充実させ、貸出し冊数を低中学年１人当たり50冊以上、高学年1人当たり40冊以上を目指す。 ４　日々の授業の中で児童の一人一台パソコンを活用し、学びの質を高め、教育効果を上げる。 ５　ICT支援員（※２）を活用して教員の研修を行うことで、教職員のICT活用能力を高め、ICT機器（※３）の特性を生かした授業を工夫する。	１〇４～６年生を中心に弱みの部分を分析し、重点的にその単元の計画を考え、実践した。週３回朝の15分間の学習時間に、漢字や計算を中心に復習や反復学習に取り組んだ。徐々に朝の学習として定着し、集中して取り組むことができた。異年齢集団で行うことで、学力だけでなく、子どもたちの人間関係の育成を目指したい。また、「読む・書くシート」（※１）等の活用を定期的に取り組んだ。 〇各学年で授業公開し、改善点について意見交換をする「授業力UP週間」を実施し、授業改善に努めた。 ▲日々、地道に取り組んできているが、全国学力・学習状況調査やみえスタディチェックの結果は、国語・算数ともに県平均を下回っているものが多く、問題文の内容を読み取り、的確に回答できる力を育てていく必要がある。 ２〇強化週間をきっかけに、各クラスで家庭学習や読書の習慣を身につけられるよう、宿題などを工夫して、指導を行った。 ▲強化週間の児童や保護者の振り返りからも一定の成果が得られていると考えられるが、自主学習や予習・復習はまだ不十分である。 ３〇図書巡回指導員や読書ボランティア（朝読・環境整備）と連携を図りながら、学校図書館の環境の充実を進めた。各学年、年間２回以上指導員による図書の授業を計画し実践した。また、低学年において未来応援人事業の講師による読書活動の授業を実施した。今年度は「各学年へのおすすめの本」をすべて読んだ完読賞の掲示を新しくし、児童の取組への意欲付けも行った結果、多くの児童が完読することができた。 ▲高学年の図書貸出冊数が少ないことが挙げられる。高学年は他学年より週あたりの国語の授業時数が少なく、週時間割に図書の時間の設定がしにくいので、曜日を決めて借りる等定期的に借りるように声かけをして、意識を高める等していく必要がある。 ４〇各学年で、活用できる単元は、積極的に活用した。また活用例に関して、職員内で情報共有を行っている。 ５〇ICT支援員からの情報を職員で共有したりするとともに、必要に応じて、アプリの使い方研修を行ったりした。 ▲４～６年生はクロムブックを毎日持ち帰っているが、クロムブックを使用しての家庭学習を充実させることが今後の課題である。	１．学力調査、みえスタディチェックについては引き続き全ての教員で採点し、授業改善に取り組む。 　弱みの単元については、モジュールの時間や授業時間にプリント等に取り組み、学力向上をはかる。 ２　強化週間をきっかけに、宿題および家庭学習等の内容等について考え、予習・復習の大切さもあわせて通信等で保護者に発信していく。 ３　引き続き、貸出冊数の目標値を一律同じではなく低、中、高もしくは低、高で分けて目標値を設定する。 　高学年が本を借りるようなしかけを考えていく。また、貸出冊数だけでなく、別の評価項目を用意し、子どもたちのモチベーションを高めていく。 ４．５　引き続き、ICT支援員と連携し、職員が実践した取り組みを共有・検討し、子ども学びの質を高めていきたい。クロムブックを活用した家庭学習について、児童が取り組みやすい内容や方法を模索していく。	〇毎回、学校運営協議会で左記の分析や体格・健康等の詳細をもらい、凄いことと思い各先生方に感謝している。 〇学校が楽しく、授業がわかる、あきらめずに考え、林をよく聞く。これらが一番大事で、先生方の努力の成果と思うので、継続してほしい。 〇復習や反復学習の取組はとてもよいと思う。学校で学び、家庭で復習する習慣をつけるよう課題に取り組まれている。 ▲復習や反復学習も大切だが、「学びたい」という気持ちの方がもっと大切だと思う。先生方も多忙で大変だと思うが、ゆとりをもって表情豊かな授業ができる環境になってほしい。子どもたちが目を輝かせて学習に取り組める授業が１日に１時間でもあれば変わってくるのではないか。 ▲「学びの質の向上を図ること」と「異年齢集団で行うことで人間関係の育成を目指すこと」のつながりがわからない。 〇自主学習ノートの掲示がとても良い。良い例を手本にすることで取り組める児童が増えると思う。 ▲校区が広く下校に時間がかかるため、帰宅が遅くなる。６限が多い高学年ほど宿題以外の時間をつくるのが難しい。 ☆自主学習の質をあげるべきと考える。 ☆高学年は自分から進んで予習、復習ができるよう保護者と連携をとって進めていくのが大切。 〇読書の貸出冊数の目標値を変えたのは良い。図書室の整備、掲示物等も工夫されている。読み聞かせも良い。 〇貸出冊数の平均値からも、充分な冊数を読むことができていると思う。 〇おすすめ本の完読賞の認定、掲示は児童にとって励みになる。 ☆読み終わった後の感想を話し合う場面や、意識の変化の有無を知る機会があると良いと思う。 〇普段あまり一緒に読書をする時間がとれないので、強化週間があることで一緒に読書する時間を作る家庭も多いのではないか。 ☆高学年がおもしろいと思う本がもっとほしい。たくさん紹介してあげてほしい。 ▲本の貸し出し冊数の目標値設定について、子どもが冊数だけにこだわり１冊１冊の本の内容が重視されなくなるのではないかと懸念する。 ・本を読むことは大人になっても必要。ただ読むだけでなく、どのように考え、理解しているかも大事。 ☆本を借りて持ち帰っても読まない児童もいる。強制的に読む時間を作ることも必要なのではないか。 ・パソコンも活用しつつ、活字離れも防ぎたい。大変だと思う。 〇児童がパソコンに入力したことが教師のパソコンで見ることができるのが良い。児童一人ひとりの考えを把握でき、考えを深め合う授業が可能になる。 ☆クロムブックでの家庭学習は必要になってくると思うが、持ち帰ることで子どもたちの体に負担がかかることも考慮してほしい。低学年児童には重すぎる。可能であれば家にある機器で共有して学習できるようにしてほしい。 ▲高学年は毎日の連絡もクロムブックになっており、親が確認するのがなかなか難しい。

令和6年度　学校関係者評価書（様式）

鈴鹿市立鈴西小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
長期欠席対策	1　学級づくり・仲間づくりを進め、一人ひとりの学校での居場所をつくることで、不登校の未然防止に努める。 2　日常生活の様子が気になる児童の情報を全職員間で共有する機会として子ども理解会議を開くとともに、必要な支援を早期に行い、一人ひとりが安心して過ごせる学校づくりに取り組む。 3　全校の欠席者を毎日一覧表に記入することで、欠席が続いている児童を明確にし、児童の変化に気づき、支援できるようにする。 4　家庭との連絡をこまめにとり、情報を共有し、学校でできる支援を行い、不登校にならないように未然に防ぐ。	1〇人権や道徳の授業を基盤とした学級づくり・縦割り班活動等による仲間づくりを進め、一人ひとりの学校での居場所をつくることで、不登校の未然防止に努めた。 2〇日常生活の様子が気になる児童の情報を職員間で共有する機会として子ども理解会議を開くとともに、必要な支援を早期に行い、一人ひとりが安心して過ごせる学校づくりに取り組んだ。 3〇全校の欠席者を毎日一覧表に記入することで、欠席が続いている児童を明確にし、児童の変化に気づき、支援できるようにした。 4〇欠席が続く場合は、こまめに保護者と連絡を取り、情報を職員全体で共有することができた。場合によってはケース会議を行い不登校にならないように努めることができた。 ▲１２月時点で１０日以上の欠席者は、令和５年度から６年度にかけて１人減少したが、３０日以上の欠席者が１人出てきた。スクールカウンセラーの活用や、担任の取組により登校できるようになった。今後も同様の取組を継続する。	1　不登校の未然防止、いじめの早期発見のために、担任を中心に児童との関係づくりを今後も行っていく。 2　定期的にケーススタディを実施し、不登校児童を生まないための学級づくりについて全職員が学習する機会を設ける。 3　児童の様子の変化により早く気づくために、家庭と連絡を取り合いながら保護者と協力して児童を見る。 4　状況によっては学校だけでの対応は難しい場合があり、その際は保護者と関係機関をつないでいく。	〇子どもたちが落ち着いて学習できる状況になっていると思う。少人数で、担任の先生の目も届きやすく、教室の壁がないことで他学級との交流もしやすい。いろいろな先生が関われることが良いと思う。 ▲少子化で児童が少なく先生も一人ひとりをよく見ることができる反面、目が届かないところでいじめがあったり、不登校につながることはないか心配。学校で仲良くしていても、帰宅後はどうか。どれだけ把握されているか。 〇児童一人ひとり生活環境の異なり、対応も困難だと思うが、きめ細やかに継続して取組がなされている。 〇気になる児童の情報を職員で共有することや、適宜ケース会議を行うことは必要であり、継続してほしい。 ▲会議の回数を多くすること自体は重要ではないのでは。 ☆活動と指標に、不登校を未然に防ぐことは書かれているが、長期欠席者に対しての指標がないので、成果と今後の改善点も含め、挙げていくべきではないか。 〇学校運営協議会の中の1人の自治会長として、時々下校時の子供たちを見ることがある。 一人寂しく離れて歩くこともなく、みんなと騒ぎながらが多い。すれ違う子どもたちはほぼ全員、大きな声で「こんにちは」、負けずにこちらも「おかえり、きをつけな」と声をかけている。自治会としてできることは、安全と変化と変調に留意することだと思っている。

令和6年度　学校関係者評価書（様式）

鈴鹿市立鈴西小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
地域連携	１　授業参観や学校行事等の学校公開を適時実施し、本校の教育活動について、保護者や地域の方の理解を深める。 ２　学校だよりや学校運営協議会、PTA会議等で、積極的な情報発信を行う。 ３　地域・外部人材の有効活用と、社会に開かれた教育課程の実現を進める。学習ボランティアを活用し、読み聞かせや学習での協力を得て、学習効果を高める。 ４　保護者・地域と連携した安全・安心の取組として、「ながら」見守りを進める。	１○今年度は年３回の授業参観、運動会、陸上競技会、森のまつりを保護者や地域の方に見ていただくことができた。 ２○学校だよりを１２月末現在で２３号発行し、発行したたよりはホームページにも掲載した。また、ホームページでは学校運営協議会の報告も掲載している。 ３○学習ボランティアを活用し、調理実習、裁縫、図画工作の補助、読み聞かせ、図書環境整備、生活科や総合的な学習の講師や補助、運動場環境整備等、さまざまな支援をしていただくことができた。また、４～６年生の縦割り班での植木についての探求学習や２・３年生の町たんけん、５年生の稲作体験では、地域の方々の協力をいただき、より深い学びを実現することができた。 ▲ボランティアに参加していただくことで学習効果があがる教科や単元、内容等について校内で整理することで、より活躍の場を広げることができると考えられる。 ４○地区市民センター等を通して地域の方々に「ながら」見守りに登録していただき、子どもの見守り活動をお手伝いいただくことができた。	１　今後も学校公開を定期的に行い、子どもの様子を参観できる機会を確保する。 ２　学校だよりや学年通信では、行事や業務連絡だけではなく、子どもたちのがんばっていることや日常生活での良かったことなどを積極的に保護者へ伝えてきた。今後も学校の状況が伝わるよう内容を工夫していく。 ３　地域や外部の人材を活用した授業を今後も継続して行う。学習ボランティアは、昨年度は保護者に限定していたが、今年度は地域の方々に募集し、登録していただいたことで活躍の場面が広がったので、来年度も引き続き募集したい。 ４　今後も市民センター等を通じて「ながら」見守りボランティアを知らせ、多くの方に登録いただけるよう地域に伝えていきたい。	○コロナ禍は学校公開が制限されていたが、公開されるようになってとてもよかった。実際に見ることで、保護者も地域の人も理解が進み、協力が得らえるようになっていく。 ▲陸上競技会については、運動会の中で済ませてほしかったという保護者の意見が多く聞かれた。 ○学校だよりは、写真も多く、活動の内容がよくわかり、保護者の方も安心していると思う。地域にも伝わっている。 ☆学校だよりは毎回楽しく拝見しているが、白黒写真は見づらい。個人情報の取り扱い等の問題点はあると思うが、学校ホームページやメール配信等でカラーで見られるようにしてほしい。 ☆学校の様子がよくわかる。児童会の取組や考えていることを児童の生の声として知らせていってはどうか。 ○ボランティア募集を保護者から地域に広げたことで、ボランティアに参加してもらえる人数が増えて、とても良かった。 ○学習ボランティアは、無理のない範囲で進めていってほしい。 ☆ボランティアにたくさんの方々が協力してくれているが、同じ人が多く参加してくれている傾向もあるので、いろいろな人が協力していただけるような工夫ができたらよいのではないか。 ○地域や外部人材の活用について。自分達が住んでいる地域のことをよく知ることは大切。これからの後継者として育て、地域産業に興味をもつよう今後も続けてほしい。 ☆福祉的な内容の出前授業も取り入れてはどうか。 ☆登校時は集団（登校班）だが、下校は人数が少なくなる。引き続き「ながら見守り」の充実を図る必要がある。保護者や自治会員の方に協力を依頼していく。 ☆昨年4月にNPO法人（チーム6ばん）を立ち上げた。地域のこんなことができればや、高齢者がお役に立てれば等。英語の通訳を含め、ほぼ全員、特技・資格を持っており、近いうちには学校を含めてお役に立てるかと思う。農作業・自治会の手伝い等、先生方に協力できるように動けたらと思っている。

令和6年度　学校関係者評価書（様式）

鈴鹿市立鈴西小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
非認知能力育成	1　自力解決、意見交流、まとめ、振り返りという流れで日々の授業を行い、あきらめずに粘り強く取り組む姿勢を育てる。 2　児童の自己肯定感を高めるために、日々の授業や学校生活の中で教師からも周りの児童からも認められる場面をつくる取組を行う。 3　道徳の学習や人権教育を通して学校やクラスのきまりを守り、正しいと思うことをする姿勢を育てるとともに、それを実行できる場面を設定する。	1〇授業の流れについて校内研修で確認して進めてきた。児童アンケート「むずかしい問題でも、あきらめないで考えようとしている」の肯定的割合が約90%で、経年変化においても上昇傾向にある。 ▲先を見通した計画的な行動や、よくないことをがまんする等、自制心にかかわるアンケート項目において、否定的な回答が増加傾向にある。 2〇相手のよいところや、関わりの中でうれしかったことなどを伝え合う取組を年間通して行うことができた。児童アンケート「わたしは得意なことやよいところがある」の肯定的割合は約96%である。また、児童会を中心に全校で「ふわふわ言葉、ちくちく言葉」に取り組み、相手を大切にする心を育む取り組みを行った。 3〇道徳や人権学習の中で、まわりに流されず、正しいことを実行する心を育てる取組を発達段階に応じて行うことができた。 ▲日常の学校生活の場面で、正しいかどうかを考えずに行動してしまう児童の姿も見られる。	1　授業の中で振り返りの時間が確保できないときもある。まとめや振り返りへの意識を児童・教員とも高め、継続して取り組みたい。 2　一人ひとりの自己肯定感を高め、互いに成長しあえる集団づくりを今後も継続して取り組んでいきたい。 3　日常の学校生活の場面で、正しいかどうかを考えずに行動してしまう児童の姿も見られるので、実際の場面をとらえて自分を見つめなおすなどの取組を継続していきたい。	〇児童アンケート結果からも、意識が向上しているのが分かる。 〇自分の意見に自信をもち、発言できる児童が多いと感じる。取組も浸透している。 ・意見交流と振り返りの活動、大切だと思う。振り返りによって理解度もわかり、それを先生がほめることで子どもたちの意欲も高まると思う。（子どもたちへの返し方が大切） ☆自己肯定感を高め、成長しあえる集団づくりはとてもよい取組だと思う。取組が進んでいくのが目に見えるような形にしていけるとよいのではないか。 〇日常生活の中の事例をテーマにして学習を行い、議論することは有効だと思う。 〇自治会として無理のない範囲で、すべてに協力できると思っている（学校の中かはわからないが）。
生徒指導	1　あいさつ運動を実施し、90%以上の児童が自分から元気な声であいさつできるようにする。 2　いじめゼロを目指すとともに、いじめアンケートを年３回実施し、早期発見に努め、早期対応を行う。 3　一人ひとりの違いや特性、個性への理解を深める授業を行い、安心できるクラスづくりを推進する。 4　子ども理解会議と校内支援会議（年間35回以上）の充実を図る。	1〇児童会を中心にあいさつ運動の取組を行い、あいさつの大切さを啓発することができた。 ▲自分からあいさつすることができるよう、更に意識を高めていく必要がある。 2〇全職員でいじめアンケートの実施と結果の共有に取り組むことができた。アンケートにより発覚したものは担任だけでなく、複数の教師で迅速かつ丁寧な対応を行うことができた。また、未然防止として日々の児童観察を丁寧に行い、教師間の情報交換を積極的に行うことができた。 ▲重大事案にはなっていないが、気持ちのすれ違いから他児童への嫌がらせや暴言等につながる事案もあり、継続して指導していく必要がある。 3〇子どもたちが一人一人の個性を認め合えるように、道徳や学活の授業の中で呼びかけ・指導を行うことができた。 4〇支援会議やケース会議を定期的に行い、児童に合ったよりよい指導を考えることができた。	1　学年や相手を問わず、誰にでもあいさつできる習慣を身につけさせるために、家庭への協力も呼びかける。また、今後は児童会以外の児童も巻き込みながらあいさつ運動を行う。 2　今後もいじめ事案は担任だけでなく、複数の教師で組織的に早期対応に努める。 3．今後も校内研修や校外の研修へ参加し、子ども理解に努め、よりよい集団作りに努める。 4．両会議とも今後も継続して行う。特に進級に伴い担任が変わる場合においては、担任間の引継ぎを丁寧かつ確実に行うために時間の確保等に努める。	〇あいさつは、よくできている。子どもたちが、学校でも家庭でも大切にされているからこそ、自信をもって知らない相手にもあいさつができるのだと思う。 〇登校の見守り、旗当番などで立つと、よくあいさつしてくれる。鈴西小の子はもちろん、卒業生（中学生）も自分からあいさつしてくれる。他の地域ではあまり見られないことなのではないか。 〇自治会としても、校外では挨拶・見守りは十分気を付けていきたい。 ▲あいさつをすれば応えてくれるが、自分からあいさつできる児童は限定されているように感じる。家庭での習慣の影響が大きいのではないか。 ▲学校の中では、知らない大人に対してもあいさつできる児童は多い。しかし、「知らない人とは話さない」ということが定着しているため、学校外ではあいさつする子が少ないのが現状。 ☆子どもが地域の人に素直に声が出せるようにしたい。子どもが声を出し、大人はそれに気づくことが大事。 〇いじめに関して、中学校区の人権フォーラム等により、児童による問題提起および改善策を議論し、校内で周知している。 〇いじめに対しての取組は、学校全体で積極的に行われている。 ・児童間の言い争い等は当然あることだと思うが、長期的あるいは集団的ないじめにつながらないよう、指導の継続が重要。 ☆いじめゼロを目指すことは大事だが、いじめが起こってしまった時の対応、対策の学習も必要なのではないか。 〇子ども理解、集団作りについての取組は、よいと思う。子どもは一人ひとりちがうので、同じようにならない子も個性であると感じる。

令和6年度　学校関係者評価書（様式）

鈴鹿市立鈴西小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
教職員の働き方改革	１　抜本的な業務縮減として、学校行事の精選と業務の平準化を行う。 ２　ＩＣＴを活用した業務改善（会議のペーパーレス化、情報共有、出席簿管理、通知表、指導要録、アンケート等）を行う。 ３　QOL（※４）を向上させ精神的ゆとりをもって職務に臨めるように月２回の定時退校日を設定し、達成できた職員の割合90%以上を目指す。 ４　学習ボランティア、スクールサポートスタッフ（※５）、学習指導員（※６）の効果的活用により、職員全員の時間外勤務を月45時間以内を目指す。 ５　業務の効率化により時間を生み出し、児童と触れ合う時間を多く取れるようにすることで、児童理解を深め、よりよい学級経営・学校経営を目指す。	１〇学校行事については、児童の実態や職員数などの現状にあわせた実施方法を検討することにより、適正規模で実施することができた。 ▲業務の平準化については、ここ数年で進んできているが、職員間での業務量に差があり、まだまだ改善の余地があると考える。 ２〇ＩＣＴの活用によりかなり業務改善が進んでいる。児童アンケートや保護者アンケートもWebでの回答とすることで業務改善を進めることができた。保護者アンケートはWeb回答のみでなく用紙での提出も可とし、昨年度より回収率が上がった（90%）。 ３〇定時退校は90%以上達成できた。 ▲定時退校しても家庭へ持ち帰って仕事をしている職員もおり、勤務時間内に業務を終えることができていない。 ４〇12月末時点で全職員、月45時間以内に収まっている。スクールサポートスタッフが印刷や掲示物の作成等の業務を担うことで時間外勤務縮減につながっている。 ５〇業務の効率化により生み出した時間を、児童理解、教材研究、心身のリフレッシュにあてることで、教育活動の質の向上へとつなげることができた。	１　行事については来年度に向けさらに見直しを進めていく。また、業務の平準化についても、次年度へ向けた会議の中でできる限り努めていきたい。 ２　ＩＣＴ機器活用による業務改善は定着しつつあるので、今後もさらに効率を上げていきたい。 ３　定時退校日の取組だけでなく、日常的にも勤務時間内に業務を終えて退勤できるよう業務の見直しや改善を行う。 ４　スクールサポートスタッフの有効活用を今後も継続する。業務の分担や改善を図ることで仕事の効率を上げ、教育活動の質を保ちつつ時間外労働の縮減を進めていく。 ５　業務の効率化により生み出した時間を有効活用し、教員の人間力を高め、教育活動の質の向上へとつなげることを今後も継続していく。	・先生方の負担が少しでも少なくなるよう願っている。 ▲児童数の減少、教師の業務の効率化も考慮し、時代の流れにそった見直しが必要だと思う。 ▲多忙な教職員の負荷軽減のための取組は、今後もさらに必要だと感じる。 ▲地域の祭りや会議等、管理職の先生方の負担が増えたかもしれない。負荷を減らせるよう、地域づくり会議等の顧問の役職も考える必要もある。 〇ペーパーレスにより端末活用での業務改善を図る傾向は、定着している。 〇児童や保護者のアンケートをWebで回答できるのは良い。集計も楽になる。 〇アンケートに回答する側も、Webだとどこにいてもできるので、とても楽だと感じる。今後も全てにおいてペーパーレスを進めてほしい。 〇定時退校日の取組について、90%以上の達成はすごいことと思う。 ▲定時退校の際、緊急の用務以外での仕事の持ち帰りがあるのであれば、問題だと思う。 ▲職員の人数、業務量等、各学校のみでは対応しきれない課題が多いのではないか。 ☆教師の仕事は「これで十分」ということはなく、やればいくらでもすることはある。「しなければならない仕事」は学校でできるとよい。「やりたいこと」は学校でなく、家でしてもよいのでは。 ・スクールサポートスタッフの時間がもっと増えるとよいですね。